

# 2021 年度活動報告 現代日本プログラム (CJP) の日本語授業

山本 真理 (関西学院大学日本語教育センター)

## 1. 通常時の日本語授業の概要と取り組みについて

本学は海外協定校約 270 校 (2022 年 1 月時点) のうち、約 190 校と学生交換協定を結んでいる<sup>1</sup>。例年、世界 20 以上の国・地域より 200 名を超える交換留学生在が来日し、日本語教育センターの現代日本プログラム (Contemporary Japan Program (CJP)) に参加する。交換留学生の受け入れは年々増加傾向にあり、コロナ禍前の 2019 年度は約 360 名にのぼった。なお、本センターでは本学に在籍する大学院留学生に対しても日本語科目の提供を行っており、2021 年度は春秋で延べ 22 名の学生が受講した。

交換留学生の留学期間は 2 セメスター (10 ヶ月)、もしくは 1 セメスター (4 ヶ月) である。日本語学習を主たる目的とした「日本語専攻 (Japanese Language Truck (JLT))」と、英語で日本の文化、社会、経済などに関する科目を履修する「現代日本専攻 (Modern Japan Truck (MJT))」の二つの専攻を設け、多様化する留学生のニーズに対応している。開講されている日本語科目は 40 科目 (約週 100 コマ) であり、レベルは初級レベルから超級レベルの 8 段階に分けられている。最も高いレベル 8 の学生は一般の学部授業も履修できる。科目内容は、総合的な日本語能力の向上を目指す科目や、読む・書く・聞く・話すといった技能別の科目などがある。週に複数コマ開講されている科目は複数教員のチームティーチングで実施されている。

## 2. 2021 年度：現代日本プログラム (CJP) の実施について

新型コロナウイルス (COVID-19) 感染症拡大に伴う政府の外国人の新規入国の停止措置によって、本プログラムでは 2020 年度、2021 年度と新規交換留学生の受け入れが困難になった。2021 年度は当初対面授業を予定していたものの春学期・秋学期いずれも同時双方向型オンラインプログラムの開講へ切り替えることになった。その結果、春学期は 33 名 (交換留學生 25 名 / 大学院生 8 名) が、秋学期は 50 名 (交換留學生 36 名 / 大学院生 14 名) が本プログラムの日本語授業に参加した。交換留學生は基本的に海外からの履修であった。所属大学は、アメリカ、イギリス、オーストラリア、中国、台湾、インドネシア、韓国、デンマーク、フランスなど全体的な人数は大きく減少したものの世界中からの参加があった。

---

<sup>1</sup> 本学ホームページ (<https://ciec.kwansei.ac.jp/abroad/program/category/detail/010.html>) <2022/1/20 アクセス>より

オンラインプログラムを開講するにあたって、それまで対面授業で行ってきた科目の目標や内容は基本的には変更しなかった。しかし、できるだけ多くの学生が履修できるように制度上の微調整や、授業活動上の工夫を行った<sup>2</sup>。

まず時差に対応した時限の開講を行なった。欧米の学生が履修しやすいよう通常1限・2限に実施される科目のうち1クラスは1限に、もう1クラスは5限以降に配置することとした。また専攻を設けずに、全科目を選択科目とした。さらに履修は1セメスターごととし、春学期から秋学期に続けて履修する学生についても再度プレースメントテストを受験させることとした。これによって学生の所属する大学の状況や生活時間に合わせて臨機応変に科目を選択・履修できるようになった。

授業活動では、海外在住の留学生が日本留学に近い体験ができるよう正規学生によるLAやボランティアを積極的に活用した。秋学期のボランティアはおよそ半数の科目で利用され、参加者の延べ人数は167名であった。それだけ多くの機会において留学生が正規学生らと接触する機会があったということである。学生アンケートからもLAとのディスカッションを通して学生同士で意見を聞く機会があったことや、ボランティアと話せたことなどに肯定的な声が聞かれた。また、クラス人数を少人数にした<sup>3</sup>。オンラインプログラムは対面に比べ、教員と学生の意思疎通が難しいため通常よりも丁寧に接する必要がある。また、授業の形態に慣れるまでは個別対応や説明に時間を要することも想定されたためである。当初は教員との距離の近さに戸惑う様子も見られたが、少人数であったために話す機会が多く得られたこと、クラスメートとよい関係を築くことができたことで楽しく学習が続けられたといった声が聞かれた。

### 3. 今後の課題と展望

本プログラムではオンライン授業開始以前から、教員が学生一人一人を大切に、丁寧に手厚いサポートを行なってきた。海外在住の留学生にとってオンライン授業は不安要素が多いと思われるが、多くの学生はそうした教員の対応によって安心して学習を続けることができた。同時に、そうした教員の対応の丁寧さが本プログラムの一つの特色であることも再認識した。

一方で、対面での留学を望む声を日々耳にしているのも事実である。学生の中には来日を夢見て大学に入学、日本語学習を継続してきたものも少なくない。今後は対面授業の再開に向け、オンラインプログラムの経験で得たことを教員間で共有し、さらによいプログラムとなるよう準備を行いたい。

---

<sup>2</sup> なお、通常時、秋学期から春学期の2セメスターの留学生を対象に行っている冬学期(2~3月に開講)は履修対象学生がいなかったため開講しないこととした。

<sup>3</sup> 結果的には全体数が多くはなかったため科目ごとの人数調整を行うことはなかった。